

キングとルーク

henpu

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

レミリアはパチュリーに問いかける……

# 目次

キングとルーク

1



# キングとルーク

一匹のコウモリが私の大図書館を飛んでいる。私は本を畳んで机に置いた。

「レミイ、普通に扉から入って来なさいよ」

そう言うのと目の間にまで飛んできていたコウモリは瞬く間に吸血鬼へと変わる。

「おはようパチエ」

「おはようレミイ」

ちなみに時刻は夕方を過ぎていた。

「久々にこんなに寝たわ……フアア……」

あらあら可愛い大あくびだこと。

「昼に活動しているからでしょうよ。それでレミイ？ どうしたのかしら？」

紅魔館のキングがここに来るのは大抵が用事がある時のみ。暇つぶしという理由も  
多いが……

キングという比喻はチェスから取っている。紅魔館の女王で頂点であるのでキング  
はレミイ。クイーンが妹のフラン。ナイトが美鈴と咲夜。小悪魔はポーンレベルだろ  
う。時々ナイトとして認めてもいい。かくなる私は――

「私は皮肉たっぷりだけれどビジョップかしら。魔女狩りにあつた魔女が司祭だなんて」

「何を言っているんだパチエ？ 確かにビジョップかもしれないけれどパチエはルークだ」

「……ルーク？ どうして私が城なのよ？」

「だつてパチエはここを動かない。そうして私を何かと守ってくれているだろう？ それならば私がキャスリングする相手はパチエだけだ。だからルークなんだよ。確かにビジョップでもあるがね」

「……呆れた。それならば私はビジョップ兼ルークになるじゃない」

「そうだ、それでいいんだパチエ」

と、このように言われてしまったため、ビジョップ兼ルークなのである。

「……チエ、パチエ？」

少し考えすぎていたらしい。レミイの声が聞こえた。

「ああ、ごめんなさいレミイ。少し考え事をしていたわ」

「考え事？ 何を考えていたんだ？」

レミイは不思議そうにしている。

「私たちをチエスの駒に当てはめたらどうなるかのお話のことよ」

「それか。また懐かしいことを」

随分と昔の事なのだ。幻想郷に来る前のお話になる。咲夜もいなかった頃、美鈴がまだメイドだった頃のお話。

「それで紅魔館のキングが私に如何様で？」

あえて私は茶化す。この話が出ればこうしか話すしかあるまい。礼節を尽くすように私は座った状態でお辞儀をするのだ。

「ビジュアルアップ兼ルークのパチエにお話をしたくてね」

それに応えるかのようにレミイは私の椅子の隣に来る。レディをエスコートするかのようにするのである。

「さて、何の話でしょうか？ キング？」

こうやって遊び心ある夜の王は好きである。

「パチエ、あなた私と一緒に死なないかしら？」

にこりとした笑顔のままですら驚いた。

「キングよ、あなたは何を仰っている？」

「そのままの意味よ？」

困った夜の王だ。私に困惑を投げつけてくる。

「口調を戻すわよ。レミイ、本当にあなた何を言っているの？」

このまま遊びながら続けていくのは無理だと判断し、私は口調を戻した。

「あら、楽しかったのに。まあいいわ、さつきも言ったけれどそのままの意味よ」

レミイは私の隣に椅子を持ってきて座った。どうにもいつものレミイの行動と噛み合わない。

「ふふ、パチエ困惑してる」

「困惑もするわよ。いきなり言われたら」

「なら、なおさら嬉しいわ」

……何なのだろう。時々レミイが分からなくなる。分からなくて当たり前なのだけ  
れど。

「それでパチエ？ 答えはどうかしら」

これはただ一つ。

「答えはノーよ。私はあなたとは一緒には死ねないわ。研究もずっとしたいし、まだ  
だ探求し足りないから」

「やっぱり、パチエならそう言うわね」

分かっていて言ったのか。

「レミイ？ 何かを夢でも見たのかしら？」

「パチエは、鋭いな。そうだ、悪夢を見た。私が真っ先に死ぬ夢、咲夜も死んでいないの



に私だけが死ぬ夢を」

珍しい。レミイは夢などあまり見ないものなのに。

「それでレミイは何を思ったの?」

これを聞くしかあるまい。

「私は死んでいられるけれど死ぬ前にパチエと死にたいと思った。だから今誘った。けど振られたな」

そつとレミイが私の肘置きの手をそつと握った。少しくすぐつたいと思った。

「ねえ、レミイ? 先にあなたが死んだとて私は死なないだろうけれども、死に際にはあなたの棺の前で死にたいと思うわ」

私が思い、レミイに対して言えるこれだけのこと。私はこれしか言えないのである。

「ははっ、一緒には死ねないけど嬉しいな、パチエ! ありがとう」

「あらあら、夜の王が一介の魔法使いにお礼なぞ言ってもいいのかしら?」

「パチエだからいいんだ。私が認めた魔法使いよ。それで良いのだから」

ふふ、強引ねえ。私もそれならば聞いてみようか。

「それならばレミイ。私が死んだらあなたは一緒に死んでくれるのかしら?」

レミイはにやりと笑った。

「死ぬるわけがなकारうに。まだ私だつてやりたいことがある。フランドールのことも

気になるし、これからの幻想郷だって楽しみだ。そんな世界で死ぬるとても？」

「ふふ……はは。レミイならそうだろうと思うわ」

楽しいものが好きなレミイはそう簡単には死なないだろう。どこに行っても強いレミイは大丈夫なのだから。

「……でも、ね。パチエ」

「どうしたの、レミイ？」

レミイの細々とした綺麗な手が私の本にまみれた手を捕まえる。

「パチエが先に死んだとしたら私はあなたの棺に入るわ。ぜつたいに。最後死ぬとして、私はパチエと一緒に入りたいのよ」

「……とても嬉しかったのだ。そうやって言ってもらえたのが。」

「本当に？ 嬉しいわ！ レミイ！ 私のわたしの棺に入ってくれるなんて。あなたなら大歓迎よ」

私は少し興奮しすぎていたのだろう。レミイの行動に気が付かなかった。気が付いたとしても対処は出来るはずがないのだが。

「パチエ、可愛いわね……」

そんな麗しい声で私の耳元で呼ぶ。その声には私は行動を停止させてしまっていた。

「私の愛しい愛しいルーク。いつまでもあなたを留めておきたいの」

そんなに愛おしい声で、私を、呼ばないで。

「レミイ……あなた……」

「パチエ……やっぱり大好きよ……振られたって愛してるのかもしれない」

私はレミイの少しの思考が読めた気がした。

『『それならば私のことをルークとは呼ばない』……そうでしょう?』

「分かっているじゃない。ね、ほらキヤスリングはそこにあるのかもしれないわよ……」

「ふふふ……変なレミイ……良いわよ私はそれでも。死んでも死ななくても、ね」

「ははははは！　面白いなあ……パチエ」

「それを言うならレミイもね」

二人の笑い声が大図書館に響き渡っていた。